熊谷 有理

いかにして社会的に構成されるのか？

：knowingの社会的性格を語るための二つの基準

I. 本稿の課題

i. 対象／主題

knowing（私たちのモノの知り方）はいかに社会的であるのか？

：私たちが対象や出来事を知る社会的な活動・過程とはどのようなものか？

ii. 先行研究の問題点

・還元論的。knowingに先立って存在する行為者の共通のパースペクティヴとの関係で、knowingの社会的活動の性質とその結果（knowledge）が説明される。

cf. ミクロ-マクロの対立（Danziger 1997）、構築主義論争

- 文脈の境界画定を可能にするカテゴリカルな基準としての行為者のパースペクティヴの実体視

↓

・表象的世界の同一性／相違の問題への適切なアプローチを欠く。

：実体の同一性による社会の同一性の説明、文脈の相違によるリアリティの相違の説明etc.

...循環論、同語反復、論点先取！

II. 着目点と方法

i. 着目点

既存の研究の前提には、行為者のパースペクティヴの実体視、その表出としてknowingを捉える見方がある。

：knowingにおいて何が重要・有意味なものと見なされるかを決めるものとして、knowingに先行して存在する行為者のパースペクティヴを想定する見方

↑

ii. 方法

knowing、行為主体、コミュニケーションの関係の再考

（SRTにおける二つのアプローチの比較・検討を通して）

III. 提案内容：知識の社会的構成論におけるパースペクティヴ変換

・knowingを考察する際の焦点シフト

：行為主体との関係でknowingを捉える　→　コミュニケーションとの関係でknowingを捉える

➥knowingが“social”であることを考察するための“表出的基準”の代わりに、“コミュニカティブな基準”を採用する。

・ジョヴチェロヴィッチとモスコヴィシの知識構成論：表出的基準とコミュニカティヴな基準

	JOVCHELOVITCH	MOSCOVICI
knowing	行為主体のパースペクティヴの“表出”	コミュニケーション状況への適合
focus	行為主体による有意味な対象構成/意味制作	パースペクティヴの自己帰属実践（knowing の実践的組織化）とそのプラグマティックな帰結
Theme	行為者のパースペクティヴの“理解”（理論的・実践的問題） ⇒認識論的主題？（人びとのknowingの認識論的地位etc.）	“信頼” ：予期や期待の自明性 ⇒共在、秩序が問題

IV．成果と考察

knowingとコミュニケーションの関係に注目してknowingとその社会的性格について問うことで…

・knowingがいかに社会的であるかという問いに対して
：knowingの社会的活動をそれに先行してある実体＝行為者のパースペクティヴの表出として記述・説明する代わりに、その活動がいかに当該のコミュニケーション状況に適合的に組織化・編制されているかという観点から記述することができる。また、そのような記述を新たな課題として設定する。

・表象的世界の同一性と相違の問題に対して
：knowingが組織化される様々な仕方（パースペクティヴの自己帰属実践の編制様式）に従い、人びとが他者と共通の世界に指向しているという前提を維持する（/前提を破棄する）実践的方法の考察を可能にする。
- 「認知的多相」の概念の可能性